

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530433

研究課題名(和文) 学術情報のゲートキーパーとしての出版社に関する文化生産論的研究

研究課題名(英文) Publishers as Gatekeepers of Scholarly Information

研究代表者

佐藤 郁哉 (SATO IKUYA)

一橋大学・大学院商学研究科・教授

研究者番号：00187171

研究成果の概要(和文)：

本研究は、大学出版部を含む学術出版社4社に関するケーススタディを中心としている。その成果は、出版社が学術情報のゲートキーパーとして果たす役割について明らかにしていく上では、それぞれの出版社が多様な経済・非経済資本をどのように組合せて組織活動を展開していくかという点と、〈文化－商業〉および〈職人性－官僚制〉の2軸をめぐる組織アイデンティティという点で自己の組織をどのように位置づけているか、という点の2点がきわめて重要であることを示している。

研究成果の概要(英文)：

This study builds on intensive case studies of four scholarly publishers in Japan. Findings of this study shows that in order to delve into the role of publishers as gatekeepers of scholarly communication, one needs to analyze the making of the dualistic portfolio strategy and organizational identity of each publisher. The dualistic portfolio of scholarly publisher consists of a number of economic and non-economic capitals. The culture-commerce and craft-bureaucracy constitute two crucial axes of the organizational identity of the scholarly publisher.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：組織アイデンティティ・複合ポートフォリオ戦略・創発性・学術界・大学界・査読制度

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、学術出版のみならず日

本の出版業全体に見られる危機的な状況に関する問題認識がある。出版物全体の売上は、

1997年に戦後はじめて(実額ベースで)前年の水準を割って以来ほぼ一貫して下落傾向にあるが、それに加えて30パーセントから40パーセントという大量の返品率や、書籍全般の低価格化傾向と商品寿命の短命化もあいまって、多くの出版社は文字通りの「自転車操業」を強いられている。さらに、第二次大戦後の「出版革命」を支えてきた2本の柱である再販制(再販売価格維持制度)および委託販売制(返品を条件とする買い切り制度)もその維持が危ぶまれている。このような出版不況および制度の危機にあつて、学術書、とりわけ「原報」ないし「一次文献」的な性格をもつ学術書は、きわめて深刻な事態を迎えている。実際、かつては数千部のオーダーで刊行可能であったタイプの書籍が千部を割ることも珍しくなくなっている。また、じゅうらい多くの場合各出版社が他のより経済的効率性の高い出版物の収益によってその出版を支えてきたのであるが、そのような方針を維持することも難しくなっているとされる。これは、書籍を中心的な媒体とし、また研究者だけでなく幅広い読者層に支えられてきた日本における学術コミュニケーションにとってかつてない危機的状况であると言える。

2. 研究の目的

本研究は、上記1に示した現状認識の上に立って、今後学術界のあり方をも含めて学術出版の進むべき方向性に関して、幾つかの指針を提出しようとするものである。実際、学術出版は、(1)研究成果の重要な発表媒体の1つであるだけでなく、(2)大学院および学部レベルでの最も有効な教育手段の一つでもあり、また(3)研究成果を広く社会一般に還元・公開していく上で不可欠の媒体である。本研究では、このように知の生産と再生産という点においても、学術研究、高等教育、そして社会全体の文化水準のレベルアップにとっても要といえる役割を担っている学術出版に関して、出版社における意思決定プロセスの詳細に焦点を絞って、その実態を明らかにすることを主な研究目的としている。

3. 研究の方法

(1) 文献・文書資料 一般に入手可能な統計資料である『出版年鑑』『出版指標年報』等を利用した他、業界紙である『新文化』『出版月報』等を活用して、出版業界の動向を歴史的にとらえるとともに、調査期間の動向については、これをリアルタイムで把握することにつとめた。また、事例研究の対象となった4社については、社史や内部資料等を参照

し、さらに、書誌データを提供していただいた。これらの内、電子データで提供された資料については、聞き取りの際などにデータベースとして利用することができた。

(2) フォーマル・インタビュー フォーマルな形式でのインタビューの対象者の内訳は、以下の通りである——出版関係者49名、大学関係者7名。フォーマル・インタビューに際しては、その内容をテープレコーダないしICレコーダーで記録したが、その音声記録は文字に起こした上で分析を加えられた。分析にあたっては、定性データ分析専用のソフトウェアであるMAXqdaを用いた。

(3) インフォーマル・インタビュー 上記のフォーマルな形式でのインタビューの他に、インフォーマント(調査対象者)の人々とは、さまざまな機会に会話ないし対話の形で貴重な情報を頂戴した。また、フォーマル、インフォーマル・インタビューの前後には、頻繁に電子メールや書状を通して情報を提供していただいた他、発表した論文や書籍の記述についてもコメントや示唆を頂戴した。

4. 研究成果

(1) 研究成果の集大成としてのモノグラフとその章立て

本研究の成果は、その集大成とも言える、2011年2月に刊行された学術モノグラフ『本を生みだす力——学術出版の組織アイデンティティ』(芳賀学・山田真茂留との共著)にまとめられている。以下は、同書の章立てである。

序章 学術コミュニケーションの危機

第I部 キーコンセプトゲート——キーパー・複合ポートフォリオ戦略・組織アイデンティティ

第1章 知のゲートキーパーとしての出版社

第II部 事例研究——三つのキーコンセプトを通して見る四社の事例

第2章 ハーベスト社新たなポートフォリオ戦略へ

第3章 新曜社——「一編集者一事業部」

第4章 有斐閣——組織アイデンティティの変容過程

第5章 東京大学出版会——自分探しの旅から「第三タイプの大学出版部」へ

第III部 概念構築——四社の事例を通して見る三つのキーコンセプト

第6章 ゲートキーパーとしての編集者

第7章 複合ポートフォリオ戦略の創発性

第8章 組織アイデンティティのダイナミクス

第IV部 制度分析——文化生産のエコロジーとその変貌

第9章 ファスト新書の時代——学術出版をめぐる文化生産のエコロジー

第10章 学術界の集合的アイデンティティと複合ポートフォリオ戦略

(2) 複合的ポートフォリオ戦略の創発性

上記の章立てに見るように、本研究の成果を通して示されたのは、学術出版社が学術的知や情報のゲートキーピングと「品質管理」をおこなう上で果たす役割を明らかにしていく上で、複合ポートフォリオ戦略概念が持つ有効性である。複合ポートフォリオ戦略は、本研究を通して開拓された感受概念であり、学術出版社が研究書・教科書・教養書などのさまざまなタイプの書籍を刊行することによって経済的な利益を確保しようとするだけでなく、自社の威信や名声あるいは著者との人脈的つながりといった非経済的な利害関心を追求していく上での基本的な組織戦略を指す。出版社4社のケーススタディを通して見いだされたのは、この、経済的・非経済的資本の組合せに関わる複合ポートフォリオ戦略が、いわゆる「作成計画」的な事前の計画というよりは、むしろ日々の組織活動を通して創発的に形成されていくものであるという点である。

(3) 組織アイデンティティのダイナミクス

学術出版社が採用し、また、組織活動の成果を通して修正を加えていく複合ポートフォリオ戦略の方向性は、学術出版社の組織としての基本的性格を規定する組織アイデンティティの在り方との関連が深い。すなわち、4社のケーススタディから明らかになってきたのは、「組織らしさ」としての組織アイデンティティの創出・維持・変容にあたっては、学術出版社が市場や取引先など外部環境とのやりとりの中で複合ポートフォリオ戦略の在り方を創発的に変容させていくプロセスときわめて密接に関連しているという事実である。言うまでもなく、その一方では、出版社の組織アイデンティティの側が、「わが社にとってふさわしい書籍な何か」という問いに対する答えを提供する形で、個々の書籍が持つ文化性（学術性）と商業性の、時として危ういバランスの在り方を規定し、ひいては、全社的な刊行戦略の在り方を規定していくことになる。

(4) ゲートキーパーとしての出版社と編集者

上記の組織アイデンティティと複合ポートフォリオ戦略の関係のありようは、とりもなおさず、それぞれの出版社が学術的知と情報のゲートキーパーとして果たしていく役

割を左右していくものである。この点に関して、本研究の成果として特筆すべきは、事例研究を通して、日本においては、出版社およびその編集者たちが単なる「仕分け役」ないし「篩い」としてのゲートキーピングだけでなく、むしろ一種のプロデューサーないし同志として学術的知の生産に関わる機会が多いという点である。この点は、米国における先行研究の知見を土台にして開始された本研究が、研究の途上で大がかりな軌道修正をおこなうことになった重要な背景でもある。すなわち、米国のように、少なくとも「モノグラフ」と呼ばれる種類の研究書に関しては、大幅な供給過多の状況にあり、編集者が好むと好まざるとに拘わらず、まさに「仕分け役」としての役割を果たすことになる社会とは異なり、日本のように、むしろ編集者や出版社の側が著者（研究者）の側に対して積極的に働きかけることを通して学術書を生みだしてきた社会においては、文化的媒介者（cultural intermediaries）としての出版社・編集者は、おのずから「ゲートキーパー」という用語が示唆するものとはきわめて異なる社会的役割を果たすことが少なくないのである。

(5) 学術出版をめぐる制度的環境の日本的特徴

上で述べた、研究書の刊行に関する需給関係の日米差が示唆しているのは、学術情報の生産やゲートキーピング・システムの理解においては、それを取り巻く社会制度の分析が不可欠であるという事実である。本研究の後半においては、特定の学術出版社の事例研究の範囲を越えて、そのようなマクロ環境についての分析を、国際比較を視野に置いて進めていった。その際にクローズアップされたのは、日本において1990年代末以降に本格化した教養新書の刊行ブームの背景であり、また、欧米における、書籍刊行に関わる査読制度をめぐる問題である。ある推計によれば、いわゆる教養新書と呼ばれる新書の刊行点数は1998年から2008年までの10年間の間に実に3倍以上にまで増えているとされる。これらの教養新書の著者の中には、若手の研究者やその卵が含まれる例が少なくない。また、比較的年配の著者の中には、エッセイ的な読み物や人生指南書的な新書の執筆に手を染める例も見られるようになっている。このような傾向は、日本の出版界だけでなく、学術界・大学界におけるゲートキーピング・システムが抱えてきた問題を如実に示しているものと思われる。その点に関連して特筆すべきは、日本においては、学術書の刊行に際して査読が適用される場合がきわめて少ないという事実である。この事実から明らかになってくるのは、日本においては、少なく

とも、人文社会科学系の書籍に関しては、米国や英国の場合とはきわめて対照的なゲーティング・システムが採用されてきたという点である。このような事実は、今後、日本における学術的知の再生産やイノベーションを支える仕組みと制度について考えていく上で重要な政策的インプリケーションを持つものであると言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 佐藤郁哉・山田真茂留、「学術出版のフィールドワーク——出版社における刊行意思決定プロセスに関する比較事例研究」、『社会学年誌』、査読無、51号、2010、1-8
- ② 山田真茂留・佐藤郁哉・芳賀学、「組織アイデンティティの変容過程——学術出版社・有斐閣のケース」、『社会学年誌』、査読無、51号、2010、29-68
- ③ Ikuya Sato, Manabu Haga, Mamoru Yamada, and Hidehiko Tomiyama, “Portfolio and Cultural Responsibility: Product Mix as a Survival Strategy of Scholarly Publishers,” 一橋大学日本企業研究センター編『日本企業研究のフロンティア』、査読無、3号、2010、有斐閣、3-20
- ④ 遠藤貴宏・佐藤郁哉、「制度変化の失敗プロセス——出版物の再販制度を事例として」、一橋大学日本企業研究センター編『日本企業研究のフロンティア』、査読無、6号、2007、有斐閣、157-182

[学会発表] (計 2 件)

- ① Ikuya Sato, Manabu Haga, and Mamoru Yamada, “Lost and Gained in Translation: The Significance of the ‘American Model’ for a Japanese University Press,” Annual Meeting of the American Sociological Association, サンフランシスコ, 2009年8月18日.
- ② 佐藤郁哉、「『モノグラフの危機』の時代における学術コミュニケーション——学術出版社の比較事例研究を中心に」、日本社会学会大会、東北大学、2008年11月23日

[図書] (計 1 件)

- ① 佐藤郁哉・芳賀学・山田真茂留、新曜社、『本を生まだす力』、2011年、568ページ (論文集のような性格を持つ書籍ではなく、全篇にわたって共同執筆であるため、特に該当執筆ページを指定することはできない)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 郁哉 (SATO IKUYA)
一橋大学・大学院商学研究科・教授
研究者番号：00187171

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし